

会長講演

第12回看護実践学会学術集会

看護の原点を見つめて

富澤 ゆかり

金沢赤十字病院 看護部長

日時 平成30年9月1日(土) 場所 石川県地場産業振興センター

はじめに

昨日からの豪雨にもかかわらず、このように多くの皆様にお集まりいただき、第12回看護実践学会学術集会を開催できることを心より感謝申し上げます。また、大会長という大役を仰せつかり、大変恐縮しております。このような機会を与えていただきました稲垣美智子理事長をはじめ、理事の皆様、会員の皆様に御礼申し上げます。運営委員一同、この日のために検討を重ね、準備してまいりました。皆様にとって有意義な一日となりますことを祈念しております。

1. 医療・看護を取り巻く状況変化

さて、皆さまご存じのように我が国は、少子超高齢化・多死社会へと急速に変化しています。厚生労働省の統計調査によると、平成28年、日本の出生者数は97万6千人。それに対し、死亡者数は130万7千人。平均すると一日に3,570人、実に30秒にお一人亡くなっていることとなります。

このような社会背景の中、医療を取り巻く環境も著しく変化しています。そして、人々の営みに主眼を置いた医療が重視されるにつれ、看護への期待がますます大きくなっていることを、日頃の看護実践の場で実感しておられるのではないでしょうか。

思い返せば私が看護の道を志した昭和後期は、対象を全人的に捉えることや科学的根拠に基づく看護実践が大事だと、ひたすらに教えていただいたと記憶しています。医師や看護師、それぞれの専門性の追求の時期を経て、やがてチーム医療が

強調されるようになりました。当初は、患者を中心として医療の専門職種がどのように協働し最善の医療を提供するかといったチーム医療の在り方でしたが、患者もチームメンバーであるとの考えのもと、患者を巻き込んだチーム医療へと、そのあり方も進化しています。

その頃からでしょうか、医療者主導の医療から患者の意思を尊重した医療へと変化の兆しが現れてきました。そして現在、「治す」医療から「治し、支える」医療へと医療の在り方が大きくパラダイムシフトし、それと共に地域との連携が求められる時代となりました。

2. 看護の多様性と本質

私たちは、このような社会変化や時代の要請に応えるべく、看護活動の場や看護提供体制・方法など、看護を多様に変化させ対応してきました。当面の課題と言われている地域包括ケアシステムの構築に向けても、新たな看護のあり様を模索し、実現へと邁進しなければなりません。

一方、目の前にいる対象と真摯に向き合い、そのニーズを把握し、個に適した方法で心を込めて看護実践するという看護の本質は、いつの時代も変わることはありません。

3. 心に残る恩師の言葉

私には心に残る恩師からの言葉があります。看護基礎実習Ⅰ。初めての臨床実習での出来事です。私は、慢性肝炎の急性増悪で肝庇護のために入院されている40歳代の男性患者さんを受け持たせて

いただきました。学生の私にも患者さんの方から声をかけてくださる、とても気さくなお人柄の方でした。患者さんは、点滴や安静のため臥床していることが多かったので、環境整備や全身清拭などの援助をさせていただきました。実際の場面では、「もっと力を入れて拭いた方が気持ちいいよ。」「手で支えてくれると、有難いな。」と、患者さんから教えていただくことが沢山ありました。そのたびに技術の未熟さを痛感し、これからも一層努力を重ね習得していかなければと思いました。こんな私でしたが、実習終了日には「有難う。世話になったね。これからも頑張る。」と患者さんから声をかけていただき、とても嬉しかったことを覚えています。

実習目的である療養環境整備や清潔援助行為を積極的に実践できたこともあり、私は達成感をもって実習を終えることができました。その実習記録の総評に担当教員からのコメントが記載されていました。

「看護の対象は、患者さんだよね。」

心に引掛かりを持ちながらも、教員からの助言の意味を分からずにいました。

その後も臨床で、多くの患者さんやご家族との出会いがありました。その時々で、看護師として最善と思う方法を医療者間で話し合い懸命に実践してきましたが、「本当にこれで良かったのか」と、腑に落ちないモヤモヤ感が生じるようになりました。

4. 糖尿病看護との出会い

現在、私のワークライフの一つに糖尿病看護があります。金沢に来てから携わるようになったのですが、当初、糖尿病患者さんに対する看護師の関わりに違和感を覚えました。

「この前も伝えたのに、やっぱり間食をやめれんげんて！」

患者さんから得た情報をもとにカンファレンスをしている最中に発せられた看護師の言葉です。良好な血糖コントロールを保つには、間食を控えることが重要です。ですが、実行できないでいる患者さんを駄目だと評価しているようにも受け取れる言葉です。看護師は食事療法の必要性や対処方法を患者さんに伝えたことで、その役割を果たしたと考えているのでしょうか。患者さんは、間食をやめられずにいることをどう思っているのでしょうか。そもそも間食をしてしまうのは何故なのでしょう。

「間食は、生きがいのな」そう話す患者さんが、間食をするようになった自身の歴史を私に打ち明けてくれました。患者さんのご主人は、仕事の関係で毎日帰宅が遅くなってしまいうようでした。二人いるお子様が幼い頃は、家事や育児にてんてこ舞いだったそうです。子どもたちと早々に夕食を済ませ、入浴した後は寝かせる。その習慣は、子供たちが巣立った後も続いていましたが、一人で食事することの虚しさは、自らが体験するようになって初めて気づいたそうです。帰宅が遅かったご主人は、ずっと一人で食卓についていたのに。それからは先に食事を済ませても、ご主人の食事時間には一緒に食卓につき、一日の出来事やニュースを話題にお茶を飲むことが日課となりました。やがて、お茶だけでは物足りなく感じ、果物や和菓子を食べるようになったそうです。

「話が弾んで楽しい時間だから、やめられなくて。でも、これからは食べるものを考えなくっちゃね。」

5. 患者の行為の意味を洞察すること

患者さんを前にして、客観的に見る時、それは事実の世界です。患者さんが体験している悩みや苦しみ、さらに心の奥底で起きている患者さんの体験は、語りとして表れます。いつもと違う服装だ。座る場所が変わった。患者さんの行為に着目することで、それをきっかけとして語りが生まれることがあります。そして、その語りの中に、かなり重要なことが潜んでいることを我々は体験の中で知っています。

一昨日のテレビドラマ「グッドドクター」のワンシーンです。人気のドラマなので、ご覧になられた方も多いのではないのでしょうか。見逃してしまった方のために説明しますね。悪性腫瘍で長期入院している病児です。辛い症状や苦しい化学療法にも耐え、頑張ったご褒美にと日曜日の外出を楽しみにしていました。しかし、前日の検査データが思わしくなく、外出許可は出ませんでした。楽しみにしていた外出ができないと分かり泣きじゃくっている病児に、医師が外出したい理由を訪ねているシーンです。この児の語りの中に、家族への想いが溢れていました。

「看護の対象は、患者さん」私は、患者さんの行為の意味するところに耳を傾けられる看護師でありたいと考えています。そこに「看護の原点がある」と考えるからです。

おわりに

変わるもの。変わらないもの。看護を期待される時代（とき）だからこそ、あらためて看護師一人ひとりが、自らの「看護」のあり様について省察することが大事なのではないのでしょうか。

本学会のテーマをもとに、シンポジウムでは変わりゆく姿として在宅医療を取り上げました。「在宅療養生活をデザインする」というシンポジウムのテーマのもと、地域医療を担う様々な職種の方々の視点から、これからの地域医療の在り方や在宅療養をどのように描いていくべきかについてご講演いただき、地域を巻き込む看護職に今、求められていることは何かについて、皆様と共に考えていきたいと思えます。

また、特別講演では、変わらないものとして「倫理」をテーマに勝原裕美子先生にご講演いただき

ます。患者さんご家族の傍らにいて、その想いに寄り添う看護を実践したいと願う私たちの根底にある倫理観について、あらためて見つめ直す機会になるものと期待しています。

ランチオンセミナーには、看護師に絶大な人気を誇る松村啓史先生をお呼びしました。先生には、「是非、元気が出るお話を」とお願いしています。笑い感動と、そしてハンカチが手放せない時間となるはずですよ。

運営におきましては、何かと不手際もあると思えますが、参加していただいた皆様と共に作り上げる学術集会になればと思っています。寛容なお気持ちと対応で、素晴らしい一日となりますようご協力をお願いして、私の講演を閉じさせていただきます。

有難うございました。